



本町だより

横浜市立本町小学校 令和5年 9月29日 発行 第609号

暑い日もようやく… 秋物語に

校長 田川 斉史

夏休みが終わっても厳しい暑さが続きました。熱中症予防のため、屋外での活動や激しい運動、外遊びの制限、教室での学習への変更などをしました。思い切り遊べない、体を動かさないもどかしさがきつと子どもたちの胸にあったと思います。

10月から、すべての学年が校外学習(遠足、宿泊体験学習、修学旅行)に出かけます。とくに宿泊体験学習・修学旅行の宿泊先、4年「上郷森の家」、5年「三浦エコビレッジ」、6年「箱根高原ホテル」各施設と見学地の下検分を夏休み中に行い、企画しました。事前、事後の活動もあわせて、同じ学年の仲間との活動や生活の中で自分を上手に表現し、コミュニケーションする、そんな特別な体験となることを願っています。ご家庭でのご支援とご協力をよろしくお願いします。

◆熱戦の後で

国際陸上、バスケットボールW杯、ラグビーW杯、野球(MLBも高校野球も)等々、スポーツに熱くなったこの2か月…。2018年、サッカーW杯ロシア大会で日本代表がコロンビアを相手に勝利し、世界中から驚きの声が上がりました。アジアの国がW杯で南米のチームに勝ったのは初めて。世界が驚くのも当然です。日本代表の健闘と同時に、日本人サポーターの「ゴミ拾い」も話題になり、世界が称賛しました。試合後、日本人サポーターはスタジアムのゴミを拾い、その様子を外国のメディアが報じました。またSNSにもゴミ拾いの様子が投稿されました。今や日本代表サポーターの代名詞ともなったゴミ拾い。始まったのは1985年と実はかなり前のことなのです。

木村和司選手(当時)の『伝説のフリーキック』で知られるW杯メキシコ大会最終予選の韓国戦がきっかけでした。試合後にサポーター集団『ウルTRAS・ニッポン』のメンバーは、スタジアムのゴミ拾いをしている韓国人サポーターの老女を目にしました。その姿を見て『サッカーで負けて(試合は1-2で敗戦)、サポーターとしても負けた』と感じたそうです。これ以降、『ウルTRAS・ニッポン』のメンバーは試合後にスタジアムのゴミ拾いをするようになりました。ゴミ拾いは『ウルTRAS』のメンバーから一般のサポーターにも広がり、1997年に行われたW杯フランス大会最終予選の頃には、完全に定着。フランス大会では多くのサポーターが持参した青いゴミ袋にゴミを拾い集める姿がありました。あの青いゴミ袋はもともとゴミ拾い用に持っていったものではないのです。アウェー戦だと日本のサポーターが少なく、スタンドが寂しくなる。そこで青いゴミ袋を膨らませて、ポリウムを出し、それを試合後にゴミを集める時に使うようになったとのこと。一石二鳥のいいアイデアですね。サポーターの熱意と謙虚な心から生まれたゴミ拾い。それが世界で称賛されるのは戦績とは別に誇らしいことです。

このスタンドの片付けは今では有名な話ですが、このW杯ロシア大会では整然とした日本チームのロッカールームのことも話題になりました。決して見せる部分ではないですが、試合に負けてもしっかりと印象を残す姿に改めて感動しました。

◆伝統の灯を引き継いでいくこと

9月8日(金)の学校運営協議会での承認を経て、「本町小学校創立120周年記念事業実行委員会」を発足しました。教育奨励会、本校PTAとも連携し、令和6年度を120周年イヤーとして、教育活動の充実と記念事業の企画をしていきます。10月以降、実行委員会を開催し、具体的な計画を立てていきます。

現横浜市庁舎のある場所に「尋常高等横浜小学校(通称;横浜小学校)」、1905年、隣地に高等科を分離して「横浜市第一高等小学校」が開校しました。関東大震災の被災により、「第一高等小学校」は今の場所(花咲町)に移転。終戦後、別地に移転していた「横浜小学校」と「老松小学校」「吉田小学校」を統合し、「本町小学校」に改称され、今に至っています。(つづく)

